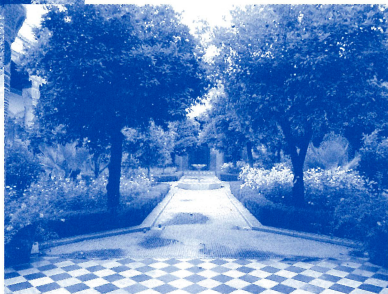


マラケシュ

マラケシュは11世紀ごろ拓けたモロッコの都市です。アルモラヴィッド朝の王都でした。乾いた大地ですが、オート・アトラスからの水源に恵まれています。

現在ではビルも立ち並ぶ大都会ですが、城壁で囲まれた旧市街(メディナ)には、昔の面影が残っています。メディナはキノコのような形をしており、北側の「かさ」の部分に人が住み、南側の「足」の部分は広大な緑地になっています。以前は住宅地部分にも緑地が設けられていましたが、人口が増加するとともに緑地部分にも家が建てられるようになり、現在はほとんどが住宅で埋め尽くされてしまいました。けれども、アラビア語で「庭」や「緑地」を表す「Arset」や「Jhane」という町名が、かつてその場所が庭であった名残をとどめています。



マラケシュ個人の庭

航空写真でメディナを見ると、どの建物にも四角い中庭(パティオ)を見つけることができます。住居は外側には小さな窓と出入り口以外は閉ざされ、パティオに向かって開かれています。パティオを通して各部屋に明かりと新鮮な空気を取りこめるようになっています。パティオはタイル張りで、十分な広さがある場合には樹木が植えられたり、噴水がつくられたりします。

個人の「庭」は囲まれた、家族や招かれた客のための、プライベートな空間なのです。

ここで、ダル・バシャ(ダル・エル・グラウィ)をご紹介します。ここは、ダル・バシャは20世紀はじめに政府高官を務め、当時の政治の実権を握っていたグラウィ氏の邸宅兼役所です。柱やアーチの彫刻や、幾何学模様の色鮮やかなタイル、天井のアトラス・シーダー材に描かれる絵はとても豪華です。

奥のパティオは約600㎡(28.5m×21m)。中央に十字の通路があり、通路の交差する場所に噴水があります。通路で区切られたそれぞれの区画にはオレンジ、ヤシ、ザクロ、バラ等が対称に栽植され、ローズマリーで縁取られています。オレンジの花の咲く春(2～3月)には庭全体だけでなく、庭の周りの部屋やアルコーブにもオレンジの香りが満ち溢れます。

水がきらめき、果樹や香りの良い植物で彩られたパティオは、暑く乾燥したマラケシュの憩いの空間なのです。



マラケシュ公共の庭

一方、公共の庭には、メディナ住人の食料を確保するという目的がありました。アトラス山脈からの水源に恵まれていても、夏の高温と乾燥は厳しく、食料確保は重要な課題でした。そのため、オリーブ、オレンジ、イチジク、ザクロ、ブドウ、ナツメヤシ等の果樹が主に栽培されていました。現在もメディナ南側の緑地ではオリーブを中心に果樹が育てられています。規則的に並んだ様子は「果樹園」といったほうがふさわしい風景です。

そして、現在でも街路樹には、食用の樹木が多く利用されています。夏場は45℃を超えるマラケシュですが、緑陰は殊のほか涼しく、街路樹のありがたさを感じます。

また、メディナの西方にある12世紀につくられたメナラ庭園は、モロッコ王国風の典型的な庭で、オリーブ園に囲まれた広大な貯水池があります。この貯水池は海のないマラケシュで軍隊の水練にも使われていたそうです。

このように、公共緑地はみどりを楽しむというより、焼け付く日差しを和らげ、水や食料を確保し、水練をするといった実用を一番の目的にするものでした。



現在のマラケシュっ子のみどりの楽しみ方

人口増加や地価の高騰で公共緑地は姿を消し、ひとつひとつの住居が狭くなったので、パティオで植物を育てることもままなりません。そこで、マラケシュっ子は残された緑地や、新しい緑地に出かけて行きます。

例えば、新市街を南北につらぬく一直線の大通の中央分離帯部分にバラが咲き、噴水が湧き出るフランス風のロマンチックな空間になっています。昼の暑さが和らぐ夕暮れには、多くの人がここで腰を下ろして語らいを楽しみます。

このように、個人の家に植物を取り込むことは難しくなっているようですが、みどりのある空間へ憩いに出かけていくことを、マラケシュっ子は楽しんでいます。